『笈の小文』の板木

永井一彰*

『笈の小文』の版本・板木

『笈の小文』の版本に四種があることは、既に天理図書館善本叢書10『芭蕉紀行文集』（昭和四十七年三月刊）の解題にその指摘がある。すなわち、

Ⅰ　平野屋佐兵衛版

Ⅱ　井筒屋庄兵衛・井筒屋宇兵衛版

Ⅲ　井筒屋庄兵衛・橘屋治兵衛版

Ⅳ　井筒屋庄兵衛・橘屋治兵衛・浦井徳右衛門版

の四種である。従来初版と目されて来たⅠの天理図書館綿屋文庫の宝永六年刊平野屋版は、衆知の如く天下の孤本。Ⅱ・Ⅲ・Ⅳに属する版本としては、管見によれば次のものがある。なお、以下論中で取り上げる資料は国文学研究資料館提供の複写に拠るものが少なくないが、それらの所蔵先については資料館マイクロデジタル資料和古書所蔵目録の略称に従うことが多い。

Ⅱ　竹冷文庫本・八戸図本・今治市河野美本・富山県図中島本・愛知県大図本・某家蔵本・柿衛文庫本・綿屋文庫本（88・12）・綿屋文庫本（88・13）・中村俊定氏蔵本（武蔵野書院「冬の日・笈の小文」複製底本）

Ⅲ　大谷大学蔵本・今治市河野美本・岐阜県図本・奈良大本（宮田正信博士旧蔵本）・太田中島図本

Ⅳ　京大潁原本・松宇文庫本・西尾市岩瀬本・綿屋文庫本（88・14）・綿屋文庫本（88・15）

Ⅰを含め、寸法・表紙などに些かの相違はあるものの、何れも半紙本一冊であることに変わりはない。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲはそれぞれ板木が異なること、これまた『芭蕉紀行文集』解題にある通り。Ⅲ・Ⅳは刊記部を除き同板。従って板種としては、Ⅰ初刻本、Ⅱ再刻本、Ⅲ・Ⅳ三刻本の三種ということになる。ⅠからⅡへの版権移動およびⅡに於ける再刻事情については、後に詳述する。Ⅲは、天明八年の京都大火で手持ちの板木を全て焼失

2009年9月3日受理　*文学部国文学科教授

した井筒屋が橘屋の協力を得て『おくのほそ道』『芭蕉翁発句集』などと共に彫り直したものと見るべきこと、拙稿「板木をめぐって」（奈良大学総合研究所所報八号）「板木のありか」（近世文藝八十四号）などに述べた通りである。Ⅳは、文化三年頃に井筒屋から芭蕉関係の板木を全て買い取った諸仙堂浦井徳右衛門が刊記部にのみ手を入れて出したものであること、これまた拙稿「板木をめぐって」（前引）「芭蕉という利権（三）」（奈良大学総合研究所所報十三号）で触れた。

先ずは、従来初版と目されて来た平野屋佐兵衛版を見てみることにしよう。天理図書館提供のカラー写真および『芭蕉紀行文集』解題によって同書の書誌を記せば次のようになる。半紙本一冊。縦227×横157粍。原装表紙、砥粉色地に銀灰色の歯朶模様を散らす。綴糸は濃紫、後補。表紙中央に白地無辺元題簽「笈の小文　全」、縦165×横37粍。巻末掲載の**図1**・**図2**がその前後表紙である。全二十七丁。柱刻「文一（～廿七終）」。毎半葉八行。その内容は、1オ～2オに「笈之小文序」（宝永四丁亥年春観桂堂砂石子）、2ウを余白とし、3オ～22ウに「笈の小文」を（**図3**は3オ冒頭部）、23オ～27ウに「更科紀行」を収め、27ウ本文末尾に続けて次のように奥書・刊記が入る（**図6**参照）。

此記行終て後乙州以謂猶翁之文
かさね及ビ烏の賦集〳〵に洩ぬること
を惜ミ後集を加ンとおもひ企ぬ
江南杙々菴乙州梓之
宝永六年孟春慶旦
二条通高倉東へ入ル町
書林　平野屋佐兵衛開版

なお、版下について『芭蕉紀行文集』解題では「版下は序より刊記まですべて乙州自筆」とするが、その根拠不明。同書よりやや先行する『図説芭蕉』（昭和四十七年一月刊）の「笈の小文」解説に「本書全文乙州の板下」とあり、善本叢書はこれによるかとも思われるが、その『図説芭蕉』もやはり根拠を示していない。その後、乙州版下説を前提にした『笈の小文』論もあったりするのだが、数葉の短冊・懐紙以外に乙州の纏まった自筆物は見当たらず、検証のしようがない。あるいは両書とも、観桂堂砂石子序文中に「此翁上がた行脚せられし時、道すがらの小記を集てこれをなづけて笈のこぶみといふ。（中略）爾来門葉多しといへども唯乙州にのみ授見せしむ。乙州其群弟と共にせざることをなげき、今般梓にちりばめて世伝を広ふせんと欲して物す」とあり、また奥書にも「江南杙々菴乙州梓之」とあるところに引かれての記述ではないかとも思われる。管見によれば、題簽・序・本文・奥書（除、刊記部）は同筆。いかにも手馴れた感じの版下で、果たして乙州にこのようなものが書けたかという疑問は拭えない。砂石子が前引の文に続けて「乙州其群弟と共にせざることをなげき、今般梓にちりばめて世伝を広ふせんと欲して物すといへども、俄に病に遇て息ぬ。暫愈日を俟といふなる。」と言い、また「乙州之因懇求不得止染筆畢」と述べるところに従えば、出版企画時に乙州は病中だったはずで、その乙州の求めにより砂石子なる人物が版下をものしたと読めなくも

ない。それについて断言はなお憚られるものの、『笈の小文』出版の背後には乙州個人のつもりではなく、かつて宮本三郎氏が「『笈の小文』への疑問（上）」（『文学』昭和四十五年四月号）で該書の書名につき「その命名には売行を考慮しての出版元の希望も関与せぬものとは言えない」と述べられた如く、専門書肆の企画を想定すべきで、乙州版下説はいかにも根拠が脆弱である。

さて、この平野屋版をはじめ、『笈の小文』の版本はすべて半紙本で出版されていることは先に触れた。が、同書を半紙本として見た場合、少なからぬ違和感があることは否めない。それは、**図3**・**図5**に示したように、半紙本にしては綴じ目側それに本文上部の空白が大きいということである。逆に版芯部は窮屈で、柱刻の「文（丁付）」のところが本文と混じって目障りな感じがする。これは、Ⅰ～Ⅳの全ての版本に共通する印象である。それはつまり、『笈の小文』の板木は半紙本用のそれよりもサイズが小さかったことから生ずる結果である。では、想定される板木のサイズは何かというと、最も近いのは枡形本のそれである。因みに、いま雲英末雄氏編『元禄版おくのほそ道』の図版（原寸影印）により刻面の寸法を測ってみると、字高がほぼ128粍、半丁の幅（版芯から端の行まで）はほぼ120粍。平野屋版『笈の小文』のそれは、字高が145～147粍、幅はほぼ120粍。『笈の小文』の方が字高がいくぶんか高いが、元禄版『おくのほそ道』本紙の丈は166粍あり、**図3**と**図4**を見比べていただければ判るように、『笈の小文』の刻面を元禄版『おくのほそ道』に重ねてみると、その紙面の中にすっぽりと収まる。つまり、『笈の小文』は枡形本として出版することも可能であったわけで、それは『笈の小文』版元が枡形本を意識して板木を仕立てたことを意味する。

ここで新たに生まれるのが、

○『笈の小文』が枡形本を意識して企画されたのは何故か。

○板木が枡形本に近いサイズで作られているのに、何故半紙本仕立てにしたのか。

という二つの疑問である。これらの疑問はⅠからⅡへの版権移動を解く鍵にもなり、さらに平野屋佐兵衛版は果たして初版本なのかという問題にも繋がって来る。先ず、一つ目の疑問についてであるが、枡形本は俳書の版本としては特殊な形態で、その例は極めて少ないことに注意せねばならない。管見に入ったものとしては、元禄版『おくのほそ道』以前では天理図書館綿屋文庫蔵『俳風大横手』（西六・梅幽編、延宝八年井筒屋庄兵衛刊）の一点のみ。『おくのほそ道』以降のものでは、後で取り上げる『芭蕉翁／奥細道　拾遺』（莎青編、延享元年西村源六刊）、それに岡本勝氏が「枡形本の俳書」（『俳文学こぼれ話』に収録）に紹介された『つえのひゞき』（翠川・米府編、文政十一年刊）の二点に留まる。岡本勝氏によれば、『つえのひゞき』は翠川・米府らの辛洲（現三重県）から松島までの紀行で、「寸法は縦十六・六糎、横十三・七糎の枡形本である。題簽は表紙中央に貼付されているが、素龍本にならって金切箔が散らされ、「つえのひゝき」と記されている。首尾に一丁ずつ白紙が添えられているのも、素龍本を真似たもの」の

由。氏の言われる「素龍本」とはそれを忠実に模した元禄版『おくのほそ道』の意であろうが、この二点が元禄版『おくのほそ道』を強く意識して造られたものであることは、書型・書名・内容からも明らかなところ。かような例から考えると、宝永版『笈の小文』の板木が枡形本に近いサイズであるのもまた元禄版『おくのほそ道』を意識したのではないか。それを企画した版元はおそらく平野屋佐兵衛ではないことについては後述するが、ではその某書肆は枡形本に近いサイズで板木を仕立てたのに、何故半紙本仕様で出版したのであろうか。この問題を解く鍵となるのが、雲英末雄氏が『元禄版おくのほそ道』に紹介された二種の異板本である。その一つに元禄版『おくのほそ道』を被せ彫りした「有丁付本」がある（**図8**参照、『元禄版おくのほそ道』より転載）。雲英氏はこの本を「別版」として分類しておられるが、これは当時の出版の常識から言えば明らかな重類版（海賊版）と見るべきもの。この「有丁付本」がやはり半紙本で出ている。本来枡形サイズの本を半紙本として仕立てたため、綴じ目側それに本文上部の空白が大きい・版芯部は窮屈という『笈の小文』と全く同様の印象を与えるのであるが、この「有丁付本」の版元が何故半紙本仕様としたのかと言えば、その理由は一つしかない。それは、枡形本という特殊な仕立てで出せば、『おくのほそ道』の重類版であることが一目瞭然となるからである。本のサイズを態と変えるのは、重類版の差し構えから目を逸らすための、いわば「目くらまし」なのである。ちなみに、雲英氏が紹介されるいま一つの異板本は、やはり被せ彫りによって本文を白字摺りにした「桜寿軒本」（**図9**参照、『元禄版おくのほそ道』より転載）であるが、この本も枡形よりやや縦長で、ここにも同様の「目くらまし」意識がある。ちなみに両書の題簽、枡形本サイズのそれを転用しているため、表紙と題簽のバランスが良くない。なお、重類版の版元が「目くらまし」として本のサイズを意図的に違うものにすることあったことについては、後で『発句題林集』を取り上げて論述するが、拙著『藤井文政堂板木売買文書』「重類版」の項も併せて参照されたい。

さて、右の「有丁付本」「桜寿軒本」の事情は、そのまま『笈の小文』の場合にも当て嵌まるのではないか。つまり、『笈の小文』を最初に企画した某書肆は、元禄十五年の出版以来宝永にかけて好調な売れ行きを見せつつあった井筒屋版『おくのほそ道』にあやかるべく枡形本に近いサイズで板木をこしらえたものの、重類版と見做されるのを避けるため、半紙本として仕立てたのではないかということである。その際、題簽は枡形本として用意されていたものから半紙本用のそれに差し替えられたのであろう。が、結局は『おくのほそ道』の版元井筒屋から重類版差し構えがあり板木を没収されたと考えてみると、ⅠからⅡへの版権移動もすんなりと理解出来るのである。

『芭蕉翁／奥細道　拾遺』

如上の問題を考えるための参考例として、『芭蕉翁／奥細道　拾遺』（以

下、『拾遺』と略称する）を取り上げてみよう。該書は枡形本一冊。全三十二丁。編者莎青の序文（寛保三年初冬）・「勘物」に続き、細道旅中芭蕉句十四句及び「五月雨を」歌仙など芭蕉一座の連句五巻を紹介したあと、月窓団斎の序に続けて莎青の四季発句五十句、諸家四十八名の四季発句百六十章を収録し、巻末に七月十日付の莎青宛蓼太書簡を添える。管見に入った版本として、①芭蕉翁顕彰会本（128・1）②三原図書館本③鶴岡市郷資本④麗沢大学図書館本⑤綿屋文庫A本（128・39）⑥綿屋文庫B本（128・19）の六本がある。このうち①②③④には表紙中央上部に「芭蕉翁／奥細道　拾遺」の無辺元題簽が残る。**図10・11**が芭蕉翁顕彰会本の前後表紙である。寸法は、縦186×横142粍。刊記は最終丁三十二丁の裏に入り、①②が「延享甲子林鐘／書林　西村源六／彫工　吉田魚川」（**図12**参照、①による）、③は「蕉門書林　京寺町二条下ル町／橘屋治兵衛梓」、④⑤⑥は「延享甲子林鐘／洛陽蕉門書林　井筒屋庄兵衛／橘屋治兵衛」とあり、版面の傷みなどから考えて、①→②→③→④⑤⑥の順に出たと考えられる。題簽を含め本文板木はすべて同板で、④⑤⑥の刊記は①②の「延享甲子林鐘」をそのまま残し、書肆名のみ入れ替えてある（**図16**参照、④による）。

さて、この『拾遺』、編者莎青の序文によれば寛保三年の芭蕉五十回忌を当て込んでの企画で、枡形本というサイズ・外題角書からも元禄版『おくのほそ道』を強く意識した企画であること明々白々であること先にふれたが、決定的なのは表紙である。右六本のうち、最も摺りの早い①の西村版は枯葉色地に藍色の紗綾形模様の表紙を備えるが、元禄版『おくのほそ道』に類似の表紙を持つものが少なからずある。すなわち、相模女子大学蔵本（相模女子大学図書館編「古典文学の世界」にカラー図版収録）・岡本勝氏蔵本（上野洋三編『影印奥の細道』に図版収録）・早稲田大学蔵本（雲英末雄氏編『元禄版おくのほそ道』に図版収録）・綿屋文庫蔵の三本（80・58、80・62、80・43）がそれである。いま綿屋文庫本（80・58）により**図13**に示した。もとより井筒屋正規版の『おくのほそ道』が『拾遺』の表紙をまねる必要は全くなく、人気商品の『おくのほそ道』にあやかって『拾遺』を売ろうとした江戸の西村源六が延享当時出回っていた『おくのほそ道』の表紙を模したと見るべきこと、言うまでもない。『おくのほそ道』を模して枡形本としていること、角書にではあるが『奥細道』の外題を使用していること、さらには表紙の類似性、これだけ揃えば正規版元の井筒屋から重類版として差し構えを受ける資格が十分にある。俳文学大辞典では『拾遺』の「京都井筒屋庄兵衛・橘屋治兵衛相版」を「求版本」とするが、事実はおそらくそうではなく、井筒屋が『拾遺』を『おくのほそ道』の重類版として差し構えを起し、その板木を没収したと考えるのが自然である。

では、『拾遺』の板木が井筒屋・橘屋に動いたのは何時か。その手掛かりの一つは②三原図書館本にある。同書表紙は①の芭蕉翁顕彰会本とはやや趣を異にし、菱形地に丸に草花模様で、欠刻の状況などから①よりは少し後の出版と思われるが、巻末に「文刻堂寿梓目録　本町三丁目西村源六」三丁を添えている。ここには西村源六の出版書

百十一点（含「奥細道拾遺」。うち近日板行三点、未刻二点）を収録するが、享保・元文・寛保期の刊行書に混じって『蝶の遊』（北華著、西村源六・西村市郎衛門刊、延享二年岱昌序）、『江戸二十歌仙』（二世湖十編、延享二年九月西村源六刊）、『俳諧温故集』（蓮谷編、延享五年二月西村源六・西村市郎衛門刊）が見える。また、目録巻末近くに『東風流』（二世青峨編、宝暦六年春西村源六・西村市郎衛門刊）が「未刻」として出る。ちなみに、宝暦六年頃のものと見られる井筒屋庄兵衛の「俳諧書籍目録」（前引拙稿「板木のありか」参照）には、『拾遺』は出ていない。『拾遺』の板木が延享元年の初版後、宝暦六年頃までの十年余は西村源六の手許にあったことを証するもので、その板木が井筒屋・橘屋へ動いたのはそれ以降ということになる。もう一つの手掛かりは、板木が井筒屋・橘屋へ動いたあと入木によって修正された④麗沢大学図書館本⑤綿屋文庫A本⑥綿屋文庫B本の刊記である。この刊記部「洛陽蕉門書林　井筒屋庄兵衛／橘屋治兵衛」の書体（**図16**参照）は、雲英末雄氏が『元禄版おくのほそ道』に明和版として分類・掲示された『おくのほそ道』の刊記に酷似している（**図15**参照、綿屋文庫本による）。同書刊記部には「奥細道拾遺　全一冊出来／奥細道菅菰抄　全二冊出来／同附録　全一冊追ヶ出来」の広告があるが、うち『奥細道菅菰抄』の出版は安永七年であった（**図17**参照、奈良大本による）。以上纏めてみると、江戸の西村源六が出した『拾遺』が『おくのほそ道』の重類版と見做され、その板木が井筒屋・橘屋へ動いたのは宝暦六年以降安永にかけての頃、それが井筒屋・橘屋によって『おくのほそ道』シリーズの新規商品として売り出されたのは安永七年頃という結論を得ることが出来る。なお、本の内容は正規版と異なっていても書型・書名の紛らしきをもって重類版の裁定が下されるケースがあったことは、小本『俳諧七部集』を模した『西国俳諧七部集』の例があること、また重類板の板木を取り上げた正規版元が重類版を商品化する例も少なからず存在することは、拙稿「芭蕉という利権（一）」（奈良大学紀要三十一号）「芭蕉という利権（二）」（奈良大学総合研究所所報十二号）「芭蕉という利権（三）」（前引）「七部解と七部木槌」（大谷大学「文藝論叢」六十一号）などに詳述したところである。

『笈の小文』の版権

さて、かような『拾遺』の版権移動は『笈の小文』にもそっくりそのまま当て嵌めて考えることが出来るのではないか。先に**図1**・**図2**で確認したように、平野屋版『笈の小文』の表紙は砥粉色地に銀灰色の歯朶模様であった。雲英氏が『元禄版おくのほそ道』に明和版B・C・Dとして紹介された『おくのほそ道』（**図14**、『元禄版おくのほそ道』より転載）及びそのシリーズとして売り出された安永七年刊『奥細道菅菰抄』（**図17**）、それに『拾遺』の③鶴岡市郷資本④麗沢大学図書館本⑤綿屋文庫A本の三本も同様の歯朶模様の表紙がある（**図16**、④による）。先の『拾遺』の場合と同じく、正規版元の井筒屋側が『笈の小文』をまねる必要は全くなく、『笈の小文』の版元が『おくのほそ道』

を模しているのは明らかであろう。

井筒屋が『笈の小文』に差し構えをする根拠となる書物が実はもう一つあった。それは、『きその谿』である。同書は竹冷文庫本（竹冷116）によれば、半紙本一冊。表紙中央上に無辺元題簽。「きその谿　全」とある。宝永元年九月野紗帽（野坡）序。岱水編。芭蕉生前に岱水との両吟で初裏半ばまで出来ていたものを杉風と詠み継いだ「生ながら」歌仙を冒頭に、岱水一座の歌仙三巻、岱水・杉風・野坡ら蕉門諸家の四季発句二百四十八句、それに「更科紀行」を収録し、終丁四十三丁表左下隅に「岱水撰」とし、「京寺町二条上ル町／井筒屋庄兵衛板」と刊記を入れる。因みに、『笈の小文』収録の「更科紀行」底本は沖森本と考えられること既に上野洋三氏稿「『笈の小文』幻想稿」（昭和五十一年刊『俳諧攷』）に指摘があるが、その通りであろう。この『きその谿』収録の「更科紀行」底本は、岱水の断り書きによれば「翁一とせさらしなの月木曽路をかけて帰庵あり。うき事のみかたりもつくさぬそゞろごとゞも書捨給へるを、予が文庫に残して今爰に出し侍る。」ものであるらしいが、沖森本と比較すると文末部に添える芭蕉句にかなりの出入りが認められる。それについて上野氏は、『きその谿』底本はやはり沖森本であり、発句の部分については岱水が手を入れた可能性も捨て切れないことを指摘しておられる。が、その底本がどうであったにせよ、出版という観点からすれば、宝永元年に井筒屋が出した『きその谿』に既に収録されている「更科紀行」を、宝永六年刊『笈の小文』に入れたことは当然重類版として見做されたに違いない。そして、ここでも考えねばならないのが板木のサイズである。『笈の小文』の板木が『おくのほそ道』を意識して枡形本に近いサイズで仕立てられたことは先に触れた。『笈の小文』収録の「更科紀行」も当然それに合わせて枡形本に近いサイズにしてあるのだが、先行する『きその谿』は半紙本であった。これは結果としてそうなっただけかも知れないが、半紙本として一度出版された「更科紀行」を枡形に近いサイズで仕立てたところにも、あるいは『笈の小文』版元の「目くらまし」意識を読み取るべきなのかもしれない。

以上のように、『笈の小文』は、その表紙が『おくのほそ道』に類似していたこと、『きその谿』既収録の「更科紀行」も併載されていたことなどの理由により、井筒屋が差し構えを起し、平野屋から板木を没収したと見るべきである。なおその際、板木が枡形本に近いサイズであったことも、あるいは差し構えの根拠の一つになったのかも知れない。

では、それは何時のことであったのか。これについて参考になるのは旧山編『やまとがさ』である。同書は編者旧山が芭蕉の足跡を慕い、富鈴とともに吉野行脚した際の両人の句を収めたもの。柿衛文庫本によれば、刊記は「延享二丑五月日／芭蕉翁並門人／俳諧書林／京寺町二条上ル町／京都井筒屋庄兵衛／同　宇兵衛　板」とある。参照すべきは、同書巻末に添える「井筒屋庄兵衛・宇兵衛板行」の「俳諧書籍目録」四丁で、ここには『冬の日』など『大和笠』に至るまでの九十五点を挙げ、目録末尾に「右之外蕉門之俳書板行数多有之候へど

も唯今ニ而ハ板行焼失いたし居申候。跡より追々出し可申候。延享貳乙丑五月吉日　重寛板」とするが、この目録中に「芭蕉翁道之記　江州大津乙州撰　一冊」として『笈の小文』が出ている。平野屋版『笈の小文』が出たのが宝永六年、『やまとがさ』の出版が延享二年、この三十六年の間に版権移動があったというおおまかな見当をつけることが取り敢えず出来よう。もう一つ注目すべきは、『笈の小文』が井筒屋庄兵衛・宇兵衛の相合版で出ていることである。伊佐地千恵子氏の「井筒屋庄兵衛俳書出版年表」（県大国文7）を参考にして、『笈の小文』を除く両者の相合版を一覧表にしてみると、次の**表I**のようになる。

表I　井筒屋庄兵衛・宇兵衛相版俳書目録

刊　年	書　名	冊数	編　者
元禄14(1701)	桜山伏	半1	歌十
宝永1(1704)	夜話狂	半1	支考他
元文4(1739)	芭蕉句選	半2	華雀
	冬紅葉	半1	苔路
	梅鏡	半2	冨鈴
	星月夜	半2	原松
元文5(1740)	小春笠	半1	冨鈴
	むすび塚集	半1	市山
	六行会	半3	野坡他
寛保3(1743)	桑名万句	半2	杉夫
	西の奥	半2	冨鈴
	雪の流	半2	松琵
延享1(1744)	雪の尾花	半2	遊五
	雪の棟	半1	寒爪
延享2(1745)	八仙観墨なをし	半1	百川
	大和笠	半1	旧山
	秋の水	半3	馬州
	南無俳諧	半1	支考

元禄十四年の『桜山伏』・宝永元年の『夜話狂』の二点が年代的に少し離れているが、他の十六点は元文四年から延享二年までの六年ほどの間に集中している。それはつまり、井筒屋庄兵衛・宇兵衛版の『笈の小文』が最初に出されたのがこの間のことであることを示唆するとともに、その板木が平野屋から井筒屋へ動いたのが早ければ元文四年以前に溯る可能性があることをも示している。このことと関連し、興味を引くのが『七さみだれ』の版権移動である。同書は半紙本一冊。里冬編。正徳四年五月不五舎序。加賀国小松住の編者が涼菟の北越行脚を迎えた折の記念集で、巻頭の「安宅懐旧」と題した十三人の発句に続き、書名となった五月雨題の七歌仙を収め、さらに諸家発句を付載する。管見に入ったものに①今治市河野美本②松宇文庫本③富山県図志田本④洒竹文庫本の四本がある。①②の刊記は「洛陽二条　平野屋佐兵衛／加陽金澤　三ケ屋五郎兵衛／板行」とあり、③④ではこれを入木で「京寺町通二条下ル／橘屋治兵衛」と修正してある。平野屋佐兵衛が絡んだ正徳四年の出版物の版権が、後に井筒屋と組むことになる橘屋へ動いているという事実は注意しておいてよいのかもしれない。

では、井筒屋庄兵衛・宇兵衛版で『笈の小文』の板木が改刻されているのは何故だろうか。先の『やまとがさ』目録末尾に「右之外蕉門之俳書板行数多有之候へども、唯今ニ而ハ板行焼失いたし居申候」と重寛こと宇兵衛が記していることからすれば、延享二年をさほど溯らぬ時期に井筒屋は火災に遭い蔵板の一部を焼いていることになるのだ

が、『笈の小文』板木改刻はそのことと関係がありそうである。『笈の小文』を『おくのほそ道』『きその谿』の重類版として差し構えをして井筒屋はその板木を平野屋から没収したものの、間無くそれを焼失し、再刻したと考えると分かるような気がする。

『発句題林集』のこと

では次に、『笈の小文』と同様、板木・本のサイズが重類版問題と絡んでいるケースとして『発句題林集』の場合を見ておくことにしよう。

管見によれば、『発句題林集』の版本には次の三種がある。

そのⅠは奈良大学蔵本で、半紙本五冊。縦226×横161粍。茶色地元表紙。蔓草模様あり。各冊左肩に双辺白地元題簽。「發句題林集　春(夏・秋・冬・雑)」(**図18**参照)。丁付はノドに「序ノ一、序ノ二、春ノ一～春ノ八十三」「夏ノ一～夏ノ八十一」「秋ノ一～秋ノ八十」「冬ノ一～冬ノ六十二」「雑ノ一～雑ノ二十六」と入る。内題「俳諧發句題林集　春(夏・秋・冬・雑)之部　闌更閲／車蓋輯」。尾題「俳諧發句題林集　春(夏・秋・冬・雑)之部終」。序ノ一は、寛政六甲寅之夏闌更序。序ノ二は、湖東蜃州序。刊記は、本来ならば最終冊雑の末尾にあって然るべきところだが、なぜか冬の部六十二丁裏に次のように入れてある(**図20**参照)。

寛政六年甲寅夏開板
平安　桃林堂蔵板
皇都　井筒屋荘兵衛
野田治兵衛
書林　勝田吉兵衛
武村吉兵衛
浪花　鹽屋忠兵衛

ちなみに、「桃林堂」は『改訂増補近世書林版元総覧』によれば勝田喜右衛門の屋号であるが、ここは勝田吉兵衛を指すものと思われる。なおこの書、半紙本にしては題簽が寸詰まりであるが、本文(**図19**参照)及び刊記を見れば明らかなように、板木がもともと中本サイズなのに半紙本で仕立てているからである。

そのⅡは同じ半紙本で、刊記部のみを異にする五冊本である。

いま、大阪府立大学図書館本を例にとれば、縦207×横147粍。原本を見ていないので色は分からないが、元表紙で奈良大本とは異なる蔓・花の模様がある。各冊左肩に奈良大本と同板の元題簽。刊記はやはり冬の部末尾に次のようにある(**図21**参照)。

寛政六甲寅歳夏開板
平安書林　文繍堂蔵板
麩屋町三条上
勝田吉兵衛
三条御幸町西入
菊舎太兵衛
俳諧發句題林集冬之部終

この刊記部は奈良大本とは異板。この大阪府立大学図書館本と同じ

刊記を持つものに、京大穎原本（五冊）・松宇文庫本（春・夏・秋・冬の四冊）・今治市河野美本（春・夏・秋・冬の四冊）・富山県図中島本（春・冬の二冊）・洒竹文庫本（春・夏・秋・冬の四冊）などがある。今治市河野美本・富山県図中島本・洒竹文庫本は元表紙で大阪府立大学図書館本と同じ模様があり、元題簽の残るものは全て大阪府立大学図書館本と同板。

その㗊は、書型を本来の中本に戻し、外題を「題林発句集」と改めた五冊本である。富山県立図書館本は、縦181×横123粍。色は不明ながら、布目地元表紙。表紙左肩に双辺元題簽「題林発句集　春（夏・秋・冬・雑）」（**図22**参照）。冬の部末尾にある刊記は次の通り（**図23**参照）。

寛政六年甲寅夏開板
平安　桃林堂蔵板
皇都　井筒屋荘兵衛
野田治兵衛
書林　勝田吉兵衛
浪花　河内屋太助
鹽屋忠兵衛

この刊記部は奈良大本と同板で、奈良大本の「武村吉兵衛」「浪花」を削り、「浪花　河内屋太助」と入木したもの。この刊記を持つ中本に、秋田県図時雨庵文庫本（改装本五冊。雑の末尾に「蕉門俳諧書肆／大坂心斎橋通／奈良屋長兵衛／同　為三郎」の刊記もある。）・松宇文庫本（改装。五冊を二冊に合冊。）・洒竹文庫本（雑のみ一冊。表紙・題簽、富山県立図書館本に同じ。）

以上三種、全ての本の全ての丁を対校したわけではないが、刊記・題簽を除き、本文は同一板木によるものと見られる。刊記部の入木から見て、㗊はⅠよりも後、本文の欠刻もそのことを裏付ける状況にある。問題はⅠとⅡの先後であるが、やはり欠刻と、次に取り上げる『上組済帳標目』の記録からⅡが先行すると考えられる。つまり、この『発句題林集』はもともと板木は中本で仕立てられていたのに半紙本として出版され、些かの版元の入れ替わりを経て、本来の中本に落ち着いたという経緯がある。そこにはどのような事情が潜んでいたのであろうか。

この『発句題林集』、出版直後から何かとトラブルがちであったことが『上組済帳標目』の記録から知られる。関連の記録を同書から抄出してみよう。なお、冒頭の通し番号は説明の便宜上、仮に付したもの。

〈寛政七乙卯五月より同九月迄裁判〉

①一、発句題林集　大坂河喜・塩忠・丹伝より之口上書ノ写至来。

〈寛政七卯九月より同年正月迄〉

②一、発句題林集　菊や太兵衛・大和や吉兵衛両人より出版候所、大坂河内や喜兵衛・塩や忠兵衛・丹波屋伝兵衛三人より之指構、出入相済候事。

③一、・・・并発句題林集出入相済候段、大坂行事中より之書状至来之事。

④一、発句題林集板行、中川・野村所持之俳諧題林愚抄ニ差構候

段、口上書ヲ以被申出候事。并菊や太兵衛・大和屋吉兵衛より出候返答書之事。

〈寛政八年辰五月ヨリ九月マデ〉

⑤一、俳諧題林集　菊太・大吉板行致候処、発句之二字我侭ニ書加へ申候義、并丁数願写本ト相違ニ付、売買差留候事。

〈寛政九年巳九月より午正月迄〉

⑥一、十月十六日　俳諧題林集之義ニ付、江戸行事中より書状。并須市・西源より口上書弐通。

⑦一、十一月　大和屋吉兵衛殿より俳諧発句題林之返答書出ル。弐通出ル。

⑧一、十二月十一日　大吉より発句題林、江戸表行事より書状到来。

⑨一、十二月　西源より口上書出ル。□□右発句題林之義ニ付。

〈寛政十年午正月より五月迄〉

⑩一、傷寒類方之義ニ付、江戸表より書状到来。

一、右類方返書。并誹諧発句〔類〕題林集之義、返答遣ス。

（注、〔類〕は墨消し）

①②③の記録から、『発句題林集』は勝田（大和屋）吉兵衛・菊舎太兵衛版つまり前掲Ⅱの本が初版であること、出版から約一年後に大坂河内屋喜兵衛・塩屋忠兵衛・丹波屋伝兵衛の三名から「指構」があったが、その問題に一応けりがついていたことが知られる。大坂の三書肆が「指構」の根拠とした書については確認出来ていないが、Ⅰ・Ⅲの刊記部に塩屋忠兵衛が、またⅢの刊記部に河内屋喜兵衛の暖簾内とも見られる河内屋太助が出ることは注意してよい。重類版処理の最も一般的な便法として正規版版元と重類版版元との相合版としてことを収めるやりかたがあるが、Ⅰ・Ⅲで塩屋・河内屋が版元に名を連ねたのはその結果と見るべきである。そしてその問題が片付いた直後、今度は④で中川・野村からの「俳諧題林愚抄」についての「指構」がある。「俳諧題林愚抄」なる書もつきとめるに至っていないが、外題の「題林」の類似を以っての差し構えであることは間違いなかろう。この一件がどのようにけりがついたのかは記録されていない。そして、寛政八年には⑤で「発句之二字我侭ニ書加へ」「丁数願写本ト相違ニ付」、「売買差留」の処分を受けている。「発句之二字」とは外題の『発句題林集』のそれであろう。同書の闌更序文に「題林句集と号つゝ、とみにやつがれが序を需む」と、また蜃州序にも「名づけて俳諧題林集といふ」とあり、願い出の段階では「発句之二字」は無かったと思われる。「丁数願写本ト相違ニ付」は具体的には分からないが、冬の部末尾に刊記が入っていることと何か関係があるのかも知れない。つまり、願い出の折には四冊本としていたのを出版時に雑の部を加えて五冊としたなどである。この記録は出版から約二年後のことで、本屋仲間の処分としてはやや遅きに失した感は否めないが、トラブル続きの同書の記録を調べているうちに判明したのであろうか。そしてさらに⑥～⑩によれば、寛政九年から十年にかけて、江戸の須原屋市兵衛・西村源六から差し構えめいたことがあり、主版元の大和屋吉兵衛

および京都本屋仲間の行事が江戸表との対応に追われていることが分かる。この一件の結末、須市・西源差し構えの根拠も不明。

かように『発句題林集』のトラブルは四回に及び、うち三回は重類版絡みであった。そのことと、板木がもともと中本仕様なのに半紙本仕立てで出したこと、再版本Ⅰ・三版本Ⅲに井筒屋荘兵衛・野田（橘屋）治兵衛が版元として名前を連ねていることとは全く関係がないのだろうか。井筒屋・橘屋とのトラブルは『上組済帳標目』には記録されていないが、両書肆は安永三年に『類題発句集』を、また寛政五年には『新類題発句集』を出している。何れも春・夏・秋・冬・雑の中本五冊。『発句題林集』は内容的にその両書と重なるわけではないが、類題発句集であること、それに書名の類似と共に中本五冊仕立てはいかにも紛らわしい。『発句題林集』の主版元大和屋勝田吉兵衛は、当然その「紛らわしさ」を意識していたのではないか。そこで、「目くらまし」として半紙本で出したのだが、結局差し構えとなり、別件で訴えられた塩屋・河内屋も加え、井筒屋・橘屋との相合版とせざるを得なかったと考えると両書肆が再版・三版本に名を連ねた理由も分かるような気がする。三版本で本来の中本に戻したのは、相合版として落着した上は、もう「目くらまし」の必要がなくなったからに相違ない。なお、再版で武村吉兵衛が加わった理由は不明。名前が外れた菊舎太兵衛はもともと蔵板主に非ず、関わりが薄かったのであろう。

平野屋版『笈の小文』は初版か

それでは最後に、平野屋版『笈の小文』は果たして初版なのかという問題に踏み込んでみよう。筆者にその疑問を抱かせるのは、平野屋版の刊記部である。もう一度**図6**を御覧いただきたい。この刊記部、図版から明らかなように、「更科紀行」の本文末尾から一行空けて奥書があり、刊記へと続く。が、目を凝らして見ると

江南杙々菴乙州梓之

宝永六年孟春慶旦

二条通高倉東へ入ル町

書林　平野屋佐兵衛開版

の四行が、やや左へ傾いていることが分かる。しかもこの四行は序・本文とは筆跡も異なり、「更科紀行」末尾の二行および奥書の三行に較べ、刻線がやや太く墨の色も濃い。「江南杙々菴乙州梓之」以下の四行は入木ではないだろうか。**図5**の右面と**図6**を上下対照して御覧いただければ判ることなのだが、先にも記したように、この『笈の小文』の板木の刻面の幅は半丁分がほぼ120粍。この刊記部の幅は135粍で、その寸法からすると「二条通高倉東へ入ル町／書林　平野屋佐兵衛開版」の部分が本来の刻面に収まり切らないことも、この四行が入木であることを示している。ちなみに、井筒屋庄兵衛・宇兵衛再刻版では、**図7**のように、本文末尾の「吹とばす石はあさまの野分哉」の句と跋文との間にあった一行の空白を詰めているが、これは刊記部が刻面か

らはみ出さぬように配慮した結果であり、井筒屋庄兵衛・橘屋治兵衛三刻版もその版式を踏襲する。それは、再刻版・三刻版とも『笈の小文』の板木はやはり枡形本に近いサイズで仕立てられたことを意味するのだが、それはさておくとして、かように平野屋版『笈の小文』の刊記部は入木である可能性が高い。ということは、入木処理されたこの刊記部にはもともと別の書肆名・年記が入っていたかあるいは何も無かったかということになり、何れにせよ平野屋版に先行する版本が想定されねばならない。

平野屋版『笈の小文』は初版本ではないのではないかという疑問は、書肆としての平野屋の在りかたにも関わって来る。先行研究のうち、平野屋佐兵衛について詳しいのは、近世文学資料類従古板地誌編1・2に収録の『京童』『跡追』に関しての市古夏生氏の解題である。『京童』『跡追』の諸版本を精査された氏は、両書とも初版は八文字屋五兵衛板であり、その版権を引き継いだと考えられる山森六兵衛覆刻版に二種があること、版権が山森からさらに「貞享末から元禄初年頃」平野屋佐兵衛に動いていることを指摘され、元禄九年『増益書籍目録』に平野屋佐兵衛の蔵版として出る『京童』『小野篁歌字盡』『近思録雑問』『内裏名所御四百首』『藤川百首』『平忠度朝臣集』『京童跡追』『李退谿先生西銘考講義』『沢庵巡礼鎌倉記』『念佛草紙』『諸家知譜拙記』が何れも山森からの求板と見られること、そして「山森六兵衛も自ら原刻板をあまり出していなく、むしろ求板することが多かった書肆であろうこと」を指摘しておられる。氏にはまた、『江戸時代書林出版書目集成』などに拠って平野屋佐兵衛の出版書を整理された「書林編纂書目板元名寄（三）」（白百合女子大学紀要二十二号）の稿もあり、それらを参考にしながら管見に入った資料をも加え、平野屋佐兵衛の出版活動をあらあら整理してみよう。

表Ⅱは、『江戸時代書林出版書目集成』収録の元禄九年版『増益書籍目録』及び宝永六年増修版をベースに、元禄十一年版・宝永三年版・正徳五年版などとの校異を参照して作成した平野屋佐兵衛出版書目一覧で、全九十点ある。通し番号2～12は、市古氏により先行の山森六兵衛版が確認されているもの。氏が取り上げられなかった1『楊子方言』は、刊記に「寛文九年己酉年孟春吉旦／椹木町通角倉町／山森六兵衛刊行」とある一本（刈谷図村上本）、また年記なく「平野屋佐兵衛」とのみある一本（愛知教大図本）があり、これもまた山森からの求板であろう。以上十二点、宝永六年版・正徳五年版にも平野屋の蔵板として収録。

13～16は山森以外の版元の先行版が確認出来るものである。それぞれについて、概略を記せば次のようになる。

13『後太平記』は、刊記に「延寶五年丁巳孟春吉日／江府新両替町四丁目／書林／渡邊善衛門尉／開板」とある本（大和文華本）が早印。ただし、刊記部の収め方がやや不自然でこれに先行する版もあった可能性がある。この渡邊版の刊記を削り、入木で「元禄五年壬申中冬吉日／書林／平野屋佐兵衛／丸屋源兵衛／開判」と修正した本（鶴舞図本・臼杵図本・愛知教大図本・盛岡公民本）がこれに次ぎ、さらに刊

表Ⅱ　平野屋佐兵衛出版書目一覧

＊江戸時代書林出版書目集成による

番号	分類	書　名	書　肆　名	宝永六	正徳五
1	儒書	楊子方言	平野や佐	○	○
2	儒書	西銘講義	平の佐	○	○
3	儒書	近思録雑問録	平野や佐	○	○
4	儒書	諸家知譜拙記	平野や佐	○	○
5	仮名	小野篁歌字尽	平のや佐	○	○
6	仮名	鎌倉巡礼記	平野や佐	○	○
7	仮名	内裏四百首	平野佐	○	○
8	仮名	忠度集	平野佐	○	○
9	仮名	念仏草紙　ゑ入	平野や佐	○	○
10	仮名	藤川百首	平の佐	○	○
11	仮名	京わらんへ	平野や	○	○
12	仮名	同　跡追	平野や	○	○
13	儒書	後太平記	丸や源・平の佐	○	○
14	仮名	何ものがたり	平野佐	○	○
15	仮名	浅井物語	平野佐	○	○
16	仮名	うき世物語	平のや佐	○	○
17	儒書	軍林長子坊	小紅や　→　元禄11年版に「丸や源・平のや佐」	○	○
18	儒書	明心宝鑑	中野平三　→　宝永3年版に「平の左」	○	○
19	仮名	明題部類抄	中野平　→　宝永3年版に「平の左」	○	○
20	仮名	鷹百首	中野平　→　宝永3年版に「平のや佐」	○	○
21	仏書	因陀羅網	丁子や半　→　宝永3年版に「平のや」	○	○
22	仮名	可笑記	村上　→　宝永3年版に「平の佐・丸や源」	○	○
23	仮名	かなめ石	銭や六　→　宝永3年版に「平の左」	○	○
24	仮名	式目諺解	村田庄　→　宝永3年版に「平の左」	○	○
25	仮名	和歌職源	風月清　→　宝永6年版「丸屋源・平のや佐」	○	○
26	仮名	百八町記	野田庄　→　正徳5年版に「平のや佐」		○
27	儒書	厳桂詩集	→　宝永3年版に「平のや左」	○	○
28	仮名	はしら立	→　宝永3年版に「田中庄・平ノや佐」	○	○
29	仮名	茶湯評林	→　宝永3年版に「いつゝや茂・平のや佐」	○	○
30	仮名	茶湯奥義抄　古書	→　宝永3年版に「いつゝや茂・平のや佐」	○	○
31	仮名	御ゑかゝみ	→　宝永3年版に「平のや左」	○	○
32	仮名	和歌梅の花垣	→　宝永3年版に「平のや佐」	○	○
33	仮名	まきばしら	→　宝永3年版に「平のや佐」	○	○
34	仮名	庭訓書翰	→　宝永3年版に「平ノや佐・丸や源」	○	○
35	石摺	名筆画譜	→　宝永3年版に「平のや佐」	○	○
36	儒書	韻鏡切要抄	平野や佐	○	○
37	儒書	彝倫抄	平野佐	○	○
38	儒書	今川　大橋	平野や佐	○	○
39	儒書	六根清浄跋別堪	平野や佐	○	○
40	儒書	聴松堂語鏡	平のや佐	○	○
41	儒書	寒山詩	平のや	○	○
42	儒書	素書	平のや佐	○	○
43	儒書	源平系図	平のや佐	○	○
44	儒書	孝経	上村・平のや佐	○	○
45	儒書	弘安礼節	平野佐	○	○
46	儒書	小学	平野佐	○	○
47	儒書	同　字引	平のや佐	○	○
48	儒書	職源抄	平野や佐・松坂や	○	○
49	儒書	巵言抄	野田庄・平野佐	○	○
50	儒書	従政名言	平野や佐	○	○
51	儒書	省心詮要	平野や	○	○
52	儒書	前太平記	平の屋左	○	○
53	儒書	漁樵問答	平野や佐	○	○
54	儒書	素書	平のや佐	○	○
55	儒書	本朝墨宝	水田甚・平のや佐	○	○
56	医書	医筌	平野や佐	○	○
57	医書	日用食性　増補	平のや佐	○	○
58	医書	学医通論	平野や佐	○	○
59	医書	済民記	平の佐・小□□や	○	○
60	医書	学医通論	平野や佐	○	○

61	仏書	六物図	長尾平・平のや佐	○	○
62	仏書	曼荼羅縁起	平のや佐	○	○
63	仏書	三大師伝	平野左	○	○
64	仏書	選択集直牒	平野や佐	○	○
65	仏書	禅源諸詮	平野や佐	○	○
66	仮名	万世家宝	平野佐	○	○
67	仮名	女諸礼集	平のや佐	○	○
68	仮名	女歌仙抄　寸珍	平野佐	○	○
69	仮名	用文章	平野や佐	○	○
70	仮名	連歌新式	平野佐	○	○
71	仮名	年中往来	平野佐・丸や源	○	○
72	仮名	なさけくらへ	丸や源・平のや佐	○	○
73	仮名	うそ八百	平のや佐	○	○
74	仮名	謡能花伝書	平野や	○	○
75	仮名	観音物語	平のや佐	○	○
76	仮名	熊野丶本地	平のや佐	○	○
77	仮名	口まねわらひ	平のや佐	○	○
78	仮名	恋歌尽	平野や佐	○	○
79	仮名	青葉笛	平のや佐	○	
80	仮名	神道苧手巻	平野や佐	○	○
81	仮名	書札初心抄	平のや佐・丸や源	○	○
82	仮名	十炷香記	平野や	○	○
83	石摺	子昂赤壁賦	中村五・平のや佐	○	○
84	石摺	天馬賦	平のや佐	○	○
85	石摺	筆道秘伝	平のや佐	○	○
86	石摺	千字文	平野や佐	○	○
87	石摺	弘法執筆法	平のや佐	○	○
88	好色本	好色しなの梅	平のや佐	○	○
89	好色本	好色青梅	平のや佐	○	○
90	図	朱子家訓	武村予・平のや佐	○	○

記部全体を「元禄五年壬申中冬吉日／京師書林／中川茂兵衛／同　藤四郎／蔵版」と入木した本（多久市聖廟本）も残る。

14『何物語』は、岩波日本古典文学大辞典によれば「万治二年成立、八年後の寛文七年書林田中文内刊」の由。北海学園北駕本の刊記には「寛文七年霜月吉日　書林平野屋佐兵衛」とあり、「書林平野屋佐兵衛」の部分が入木らしく見える。

15『浅井物語』は、仮名草子集成の解題によれば、①初版本は不明で、②刊記部に「寛文二壬寅年八月吉日／寺町貞安前之町／丸屋庄三郎板行」とあり、「八」と住所・版元が入木処理してある丸屋庄三郎求板本、③刊年記そのままで、「洛陽書林／平野屋佐兵衛開板」と入れる平野屋佐兵衛求板本Ⅰ、④刊年記を削除した平野屋佐兵衛求板本Ⅱ、⑤無刊記平野屋佐兵衛板の版元を削って、「洛陽書林」の四字のみを残した菊屋安兵衛板の五種がある由。

16『うき世物語』（十一行本）は、やはり仮名草子集成の解題によれば、①上方板無刊記本、②巻五の二十丁（最終丁）表左隅に「平野屋佐兵衛開板」と入れる平野屋求板本、③巻五最終丁の「平野屋佐兵衛開板」はそのままで、裏表紙の見返しに「京都二条通衣店／風月堂荘左衛門」とある風月堂求板本、④巻五最終丁の「平野屋佐兵衛開板」はそのままで、裏表紙の見返しに広告を出し、そのあとに「京都書林／尚書堂三条通柳馬場東角堺屋仁兵衛／尚徳堂寺町仏光寺下ル町堺屋儀兵衛」とある堺屋求板本の四種があるとのこと。

『うき世物語』上方板無刊記本の版元は不明とするしかないが、何

れにも先行版があり、平野屋はそれを求板したこと、『後太平記』『浅井物語』『うき世物語』の三点については後に別の本屋に版権を譲渡していることが確認できる。この13～16も宝永六年版・正徳五年版にも平野屋の蔵板として収録することからすれば、三点の平野屋から他の店への版権移動は正徳五年以降ということになろう。

17～26は元禄九年版に他の書肆名で見え、その後の目録に平野屋版（含、相合版）として出るもの。26の『百八町記』は正徳五年版に、17～25の九点は宝永六年版・正徳五年版に平野屋の蔵板として出る。

なお、これ以外の平野屋佐兵衛の求板本に『豊臣秀吉譜』がある。該書は、刊記に「明暦四戊戌歳初秋吉旦／東洞院通六角口町／山口市郎兵衛板」とある一本（筑波大図本）が初版と思われ、刊記部を「明暦四戊戌歳初秋吉旦／荒川四郎左衛門」と入木した一本（加賀図聖藩本）、さらに「寶永四丁亥歳孟春吉旦／洛陽二條通観音町／平野屋佐兵衛版」（北海学園北駕本）とする平野屋版がある。

以上表Ⅱの1～26に『豊臣秀吉譜』を加えた二十七点は、平野屋の原刻ではなく求板であったということが一応確認出来る。

27～35は、元禄九年版には見えず、宝永三年版に平野屋の蔵板（含、相合版）として出て、宝永六年版・正徳五年版にもそのまま踏襲されているもの。36～90は、元禄九年版以降正徳五年版に至るまで平野屋の蔵板（含、相合版）として見えるものであるが、この27～90の六十四点が原刻なのか求板なのかは確認し切れていない。

以上のところを整理してみると、平野屋佐兵衛は元禄から正徳にかけて活動をした本屋で、求板をベースに営業をする傾向があったということが言えるのではないか。もっともそれは、27～90の六十四点が原刻か求板かというところにかかってくるのであるが、管見に入った平野屋の原刻版を見ると、その思いは一層強くなる。

平野屋の原刻版であることが確認出来る最初のものは、『歌道垣根の梅』である。「元禄十六未季春下旬／洛陽二条観音町／書林平野屋佐兵衛」と刊記がある該書（名古屋市博本・刈谷図村上本）、その刊記部に入木等の不審無く平野屋佐兵衛の原刻本と見てよいが、**図24**（名古屋市博本による）の如く板面が不整で、とても専門書肆の手になったものとは思われない。

二つめは、先にも取り上げた『七さみだれ』（正徳四年五月序）である。「洛陽二条　平野屋佐兵衛／加陽金澤　三ケ屋五郎兵衛／板行」と刊記にある今治市河野美本・松宇文庫本が初版で、金澤の三ケ屋が主版元であるかのようにも思われるが、次に触れるように涼菟関係の『糸魚川』『鰤俵』が平野屋佐兵衛から出ていることを考えると、この書も平野屋が主版元と見るべきであろう。この書もまた**図25**（酒竹文庫の再刊本による）のように全体に文字が極端に太く、版面不体裁の謗りは免れない。

平野屋原刻版の三つめは『糸魚川』である。同書は涼菟が曾北を伴ない越後糸魚川に来遊した折の記念集で、歌仙七巻・三つ物十組・発句二百余を収録。半紙本一冊。正徳五年未秋八月の編者九蚶の序がある。刊記は最終四十丁の裏に「京都二条通堺町西へ入丁／平野屋佐兵

衛板行」と入れる（**図26**左面参照）。いま綿屋文庫本（95・48）で見るに、こちらは『七さみだれ』とは対照的に刻線が極端に細いのが特徴として指摘出来るが、六丁表・八丁裏・十四丁裏・十六丁表裏・二十八丁表・二十九丁表裏などに板木の浚えが不十分なために出る墨汚れが目立ち、やはり全体的に板面が不整である（**図26**右面の六丁表参照）。また、それほどの部数を摺っているとは思えないのに欠刻が多いのはもともとの板木の材なり仕立てなりが良くないからであろう。なお、該書は『国語国文学報』（愛知教育大、昭和五十年）に岡本勝氏による「翻刻と解題」があるが、岡本本・学習院大本、題簽を異にするものの本文は同板の由。刊記も両書とも綿屋文庫本に等しい。

この『糸魚川』と同一の版下で仕立てられた書に『鰤俵』がある。洒竹文庫本（洒3310）は半紙本二冊。虚白斎竹司編。正徳六年申春三月自序。これもまた涼菟の北越来遊を記念した集で、北越・伊勢俳人を主とした季別発句に涼菟一座の歌仙十巻などを収録。刊記は後表紙見返しに「京都二条通高倉東へ入町／平野屋佐兵衛／伊勢山田一志／藤原長兵衛／板行」とある。平野屋単独版であった『糸魚川』と版下が同一であることからすると、こちらも平野屋が主版元であろう。『糸魚川』のような版面の不整は特に認められないが、やはり刻線が極端に細い。

かように平野屋佐兵衛の原刻版と見られる『歌道垣根の梅』『七さみだれ』『糸魚川』は何れも版面不整が目立つ。このことと、求板をベースに営業をする傾向があったということはおそらく無関係ではない。想像を巡らすに平野屋は抱えの彫り職人・摺り職人などのいない、言い換えれば独自の工房を持たない店だったのではないだろうか。これについて思い合わされるのが、文化三年ごろに井筒屋庄兵衛から『おくのほそ道』をはじめ芭蕉関係の書の版権を買い取り、その後の半世紀近く出版活動を行なった諧仙堂浦井徳右衛門のことである。浦井はそれまで出版事業に関わった形跡はなく、謂わば異業種からの新規参入者で、独自の出版工房を持っていたはずはないのだが、半世紀にわたり出版活動が可能であったのは橘屋治兵衛と組んだからであったと考えられること、前引拙稿「芭蕉という利権（三）」に述べた。平野屋佐兵衛もそれに近い業態で、他の本屋が出したものを求板して、しかるべき専門書肆に摺り・製本を業務委託などして蔵板として販売し、後にはさらにその版権を別の店に売るという商売をしていたのではないだろうか。平野屋原刻版の『歌道垣根の梅』『七さみだれ』『糸魚川』などの版面不整は、しかるべき専門書肆への業務委託の手間すら惜しんだ結果のように思われる。これらの版面不整と、宝永六年版『笈の小文』の手馴れた感じの版式・整った版面はどう考えても釣り合いがとれない。宝永六年版『笈の小文』の刊記部の入木は、もともとは某書肆が企画・出版したものを平野屋が求板した結果と見ると納得が行くように思われるが、如何であろうか。なお、これは平野屋佐兵衛に限ったことではないが、求板本を出す場合、刊記部に元の刊年記をそのまま残すことが多い。そうすると平野屋版『笈の小文』の刊年記「宝永六年孟春慶旦」は某書肆刊の初版のそれをそのまま踏襲した可能性

もあり、もしそうだとすればその求板である平野屋版はそれよりも少し後に出たということになろう。

ついでながら、平野屋佐兵衛が出版に関わった書として、もう一つ『日本新永代蔵』に触れておこう。近世文藝資料『北条団水集』解題によれば、刊記に「正徳三年巳正月吉日／江戸日本橋南一丁目須原屋茂兵衛／京師聚楽丸屋伊兵衛／同　二条観音町平野屋佐兵衛」とある本が初版の由。いま、都中央図本・府中之島図本で見るに、刊記部の収まりかたも不自然でなく妥当な見解とすべきであろう。その再版と見られるのが初版の刊記から丸屋の部分を削除した「正徳三年巳正月吉日／江戸日本橋南一丁目須原屋茂兵衛／二条観音町平野屋佐兵衛」という刊記のある一本（東大国文本）。これに次ぐのが、再版本刊記の平野屋佐兵衛の名前を削除し、「正徳三年巳正月吉日／江戸日本橋南一丁目須原屋茂兵衛／浪華書舗大坂淡路町難波橋筋瀬戸物屋村田庄右衛門」と村田の名前を入れた本（刈谷図村上本）である。『北条団水集』解題では三版本を再版本としているが、再版で丸屋が、三版で平野屋が外れ、最終的に須原屋が残っていることからすると、『日本新永代蔵』の主版元は須原屋茂兵衛と見るべく、平野屋は中心的な位置にはいなかったと考えてよかろう。

＊この稿へ図版掲載を許された天理大学附属天理図書館・芭蕉翁顕彰会・麗沢大学図書館・大阪府立大学図書館・富山県立図書館・名古屋市博物館、参考資料を提供していただいた小林孔氏に謝意を表する。

＊この稿は平成二十年度奈良大学研究助成に拠るものである。

平成二十一年九月三日　記

○この稿をもとに、日本近世文学会平成二十一年度秋季大会（於関西学院大学、十一月七日）で、「『笈の小文』の板木」と題して口頭発表を行なった。

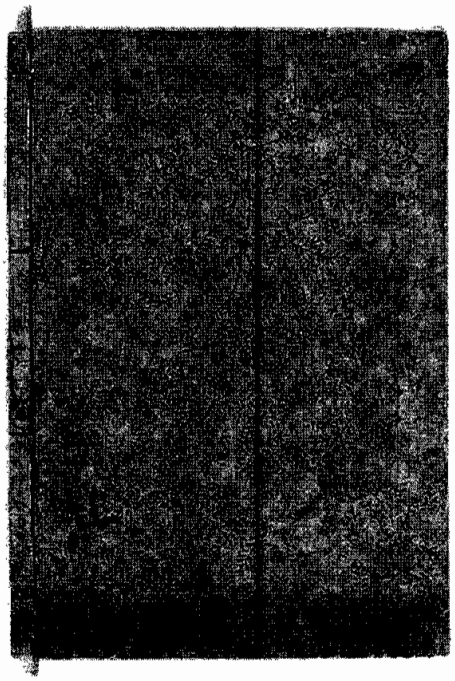


図２　平野屋版『笈の小文』後表紙

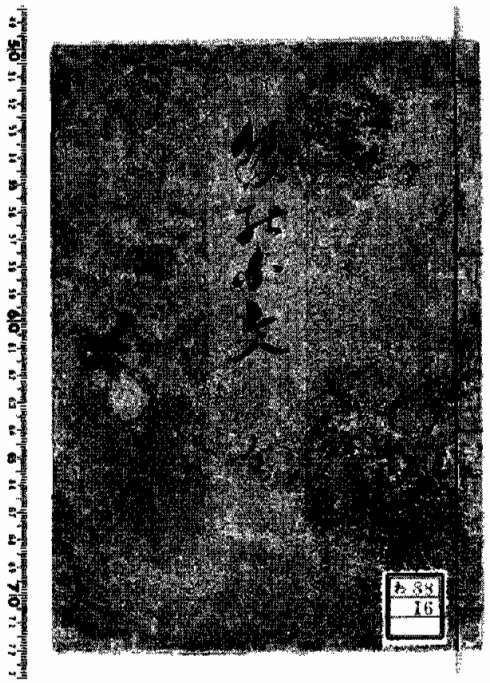


図１　平野屋版『笈の小文』前表紙

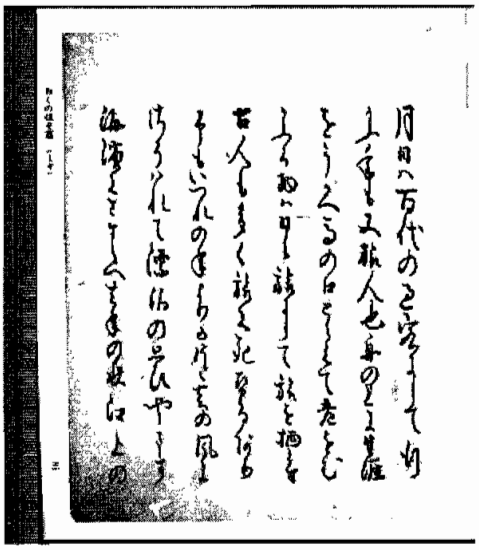


図４　元禄初版本『おくのほそ道』冒頭部

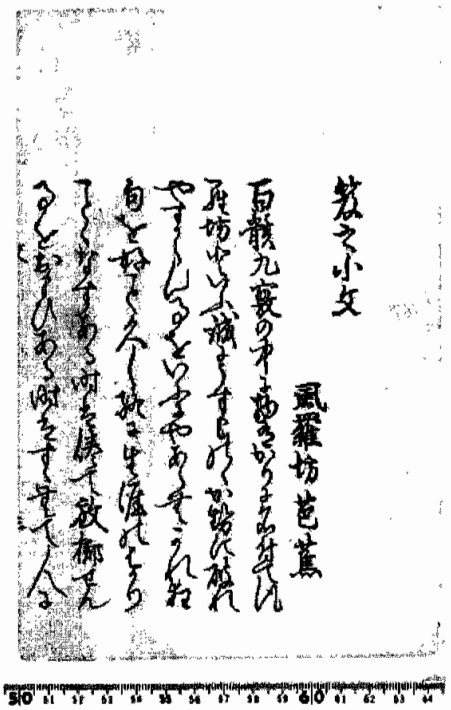


図３　平野屋版『笈の小文』本文冒頭部

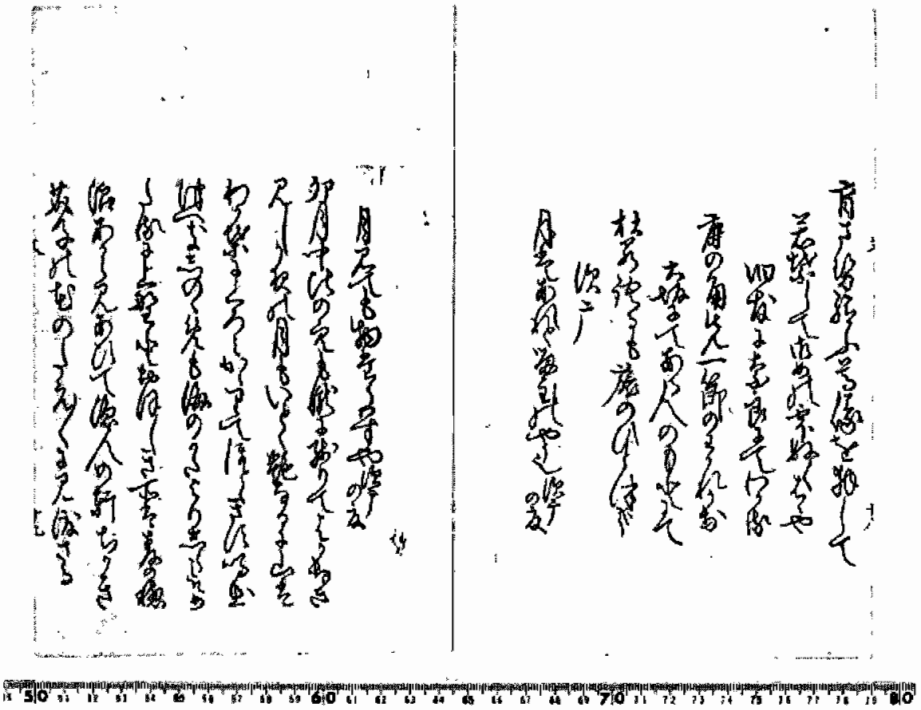


図５　平野屋版『笈の小文』19丁表・18丁裏

図６　平野屋版『笈の小文』刊記

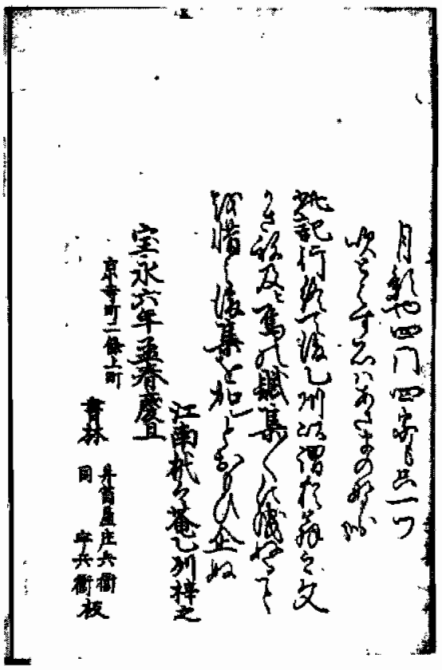


図７　再刻本『笈の小文』刊記

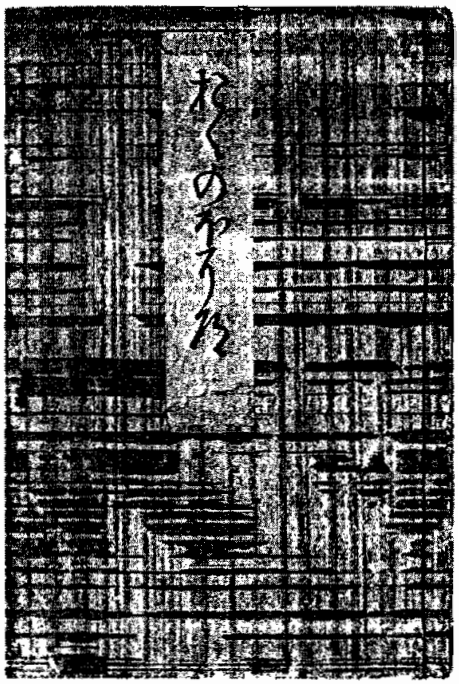


図９ 「おくのほそ道」「桜寿軒本」
表紙・本文冒頭

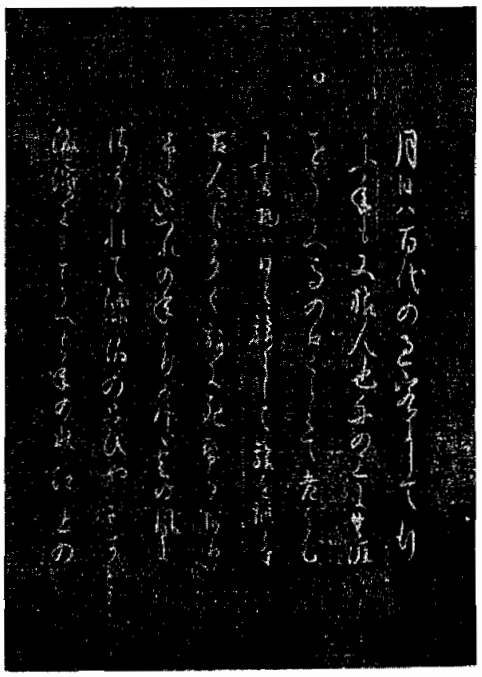


図８ 「おくのほそ道」「有丁付本」
表紙・本文冒頭

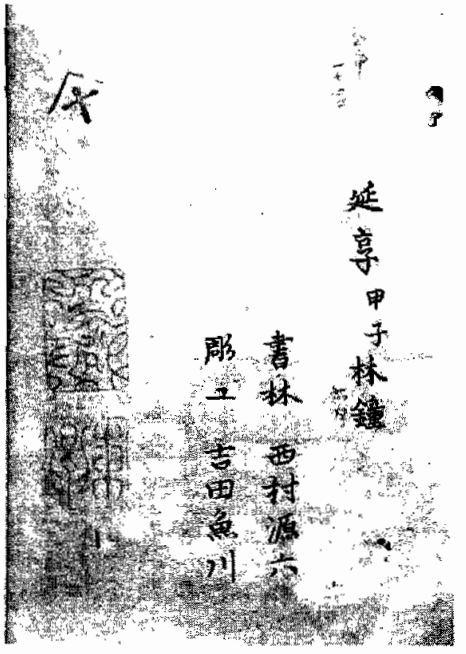


図12 『拾遺』初版本刊記

図10 『拾遺』初版本前表紙

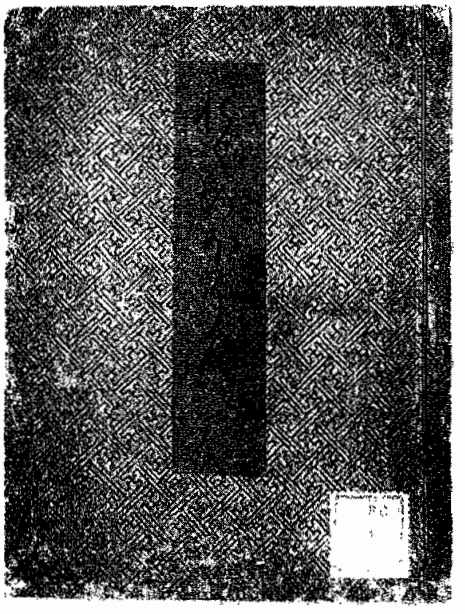


図13 元禄版『おくのほそ道』後刷本表紙

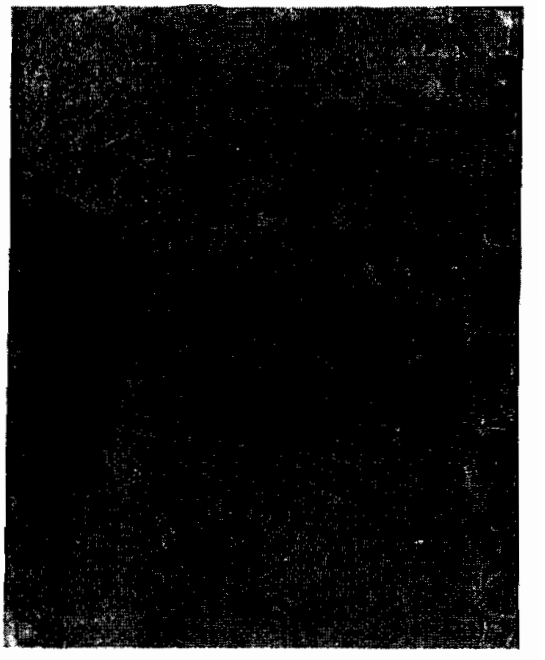


図11 『拾遺』初版本後表紙

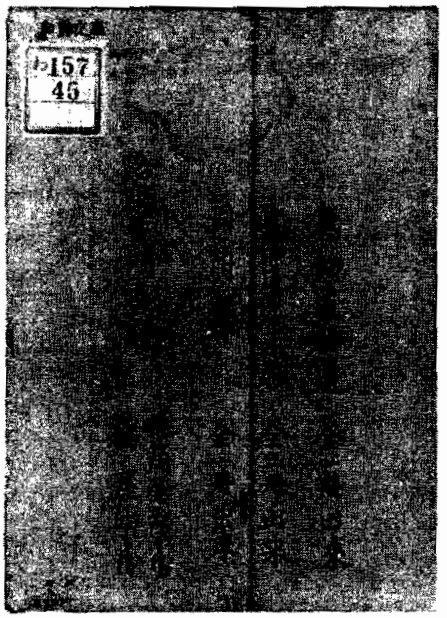


図15　明和版『おくのほそ道』刊記

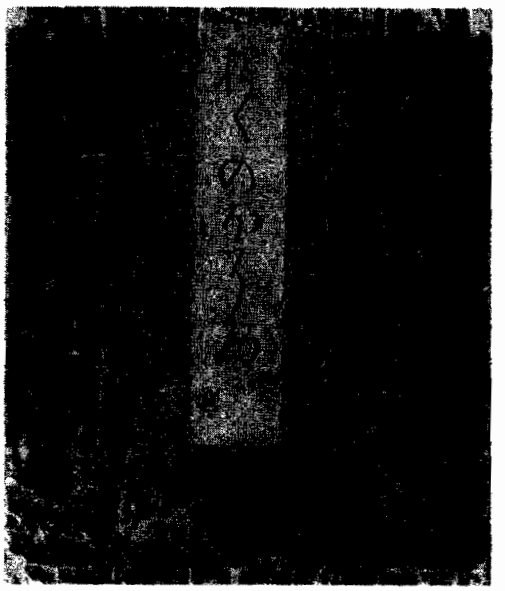
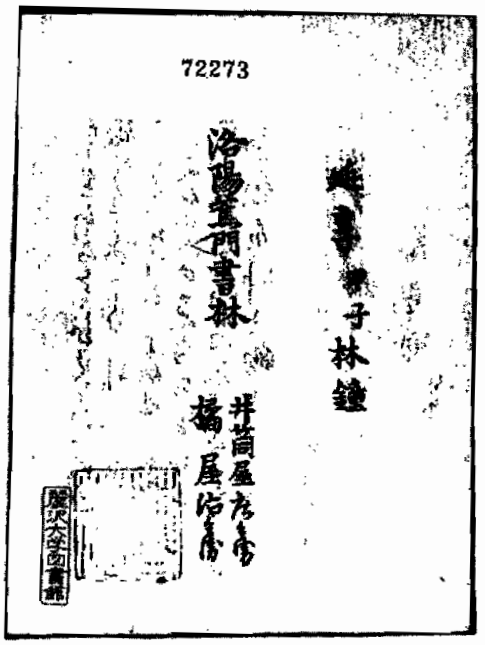


図14　明和版『おくのほそ道』表紙



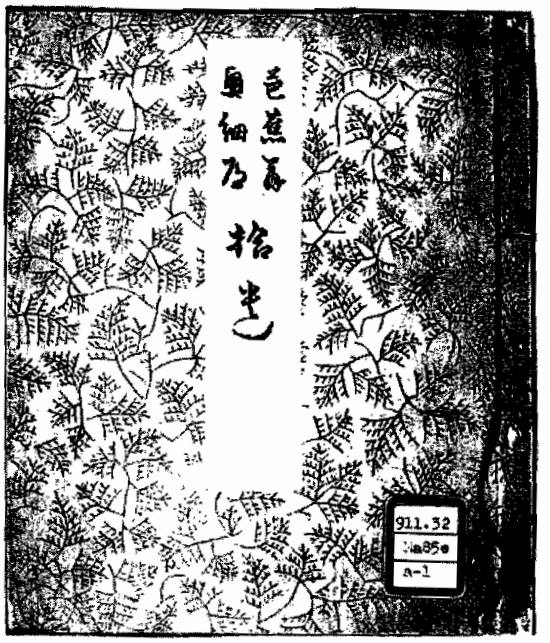


図16　井筒屋・橘屋版『拾遺』表紙・刊記

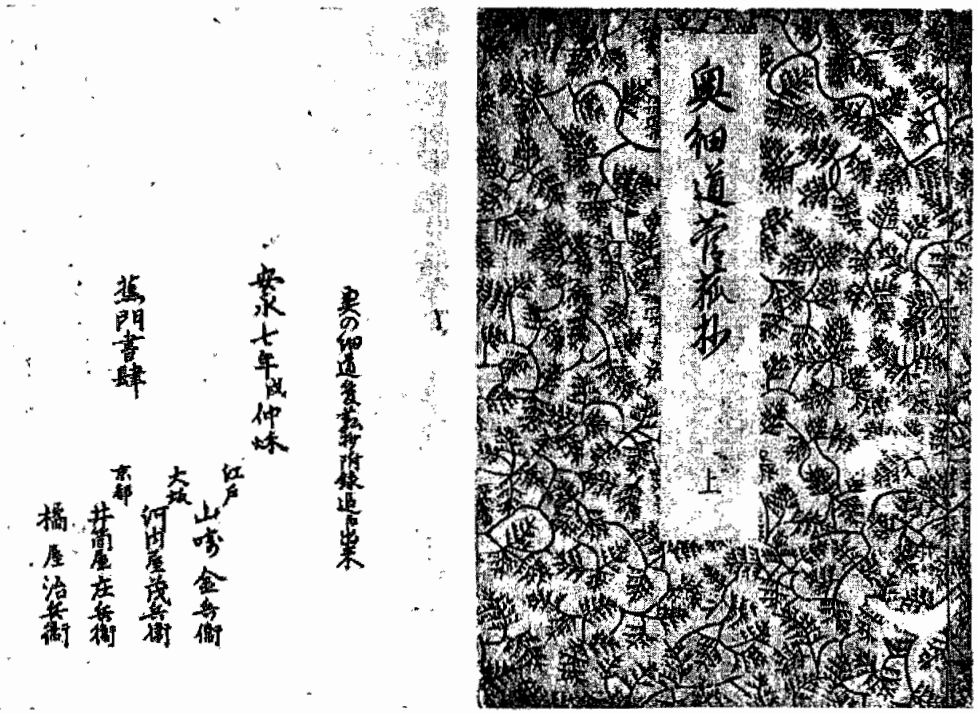


図17 『奥細道菅菰抄』表紙・刊記

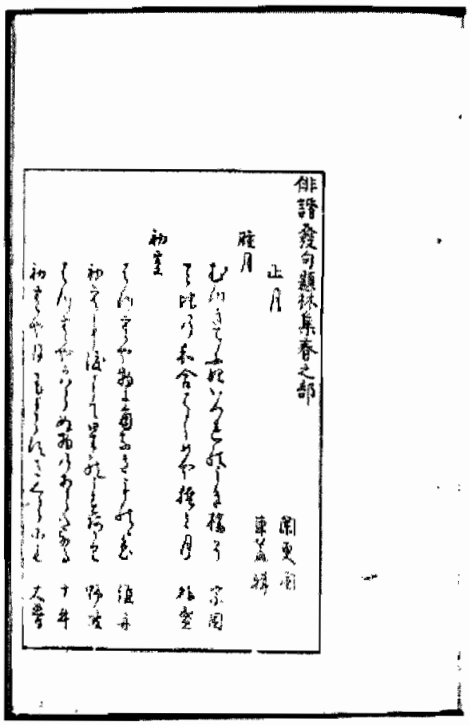


図19 『発句題林集』春の部冒頭部

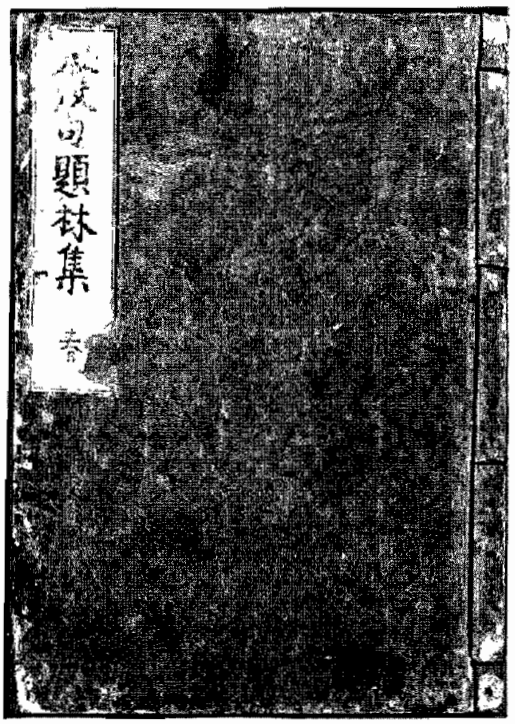


図18 『発句題林集』春の部表紙

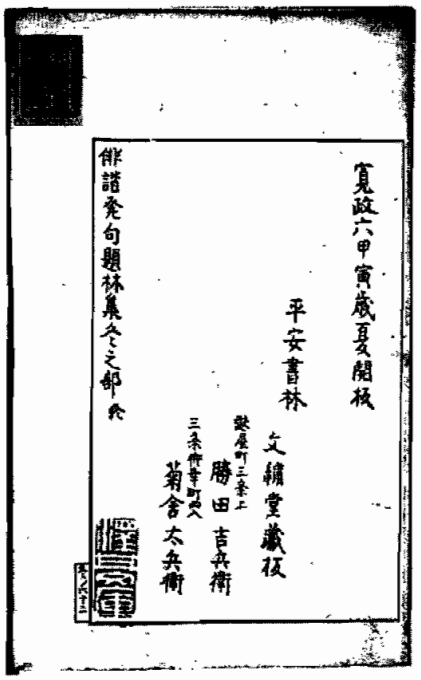


図21 『発句題林集』初版本刊記

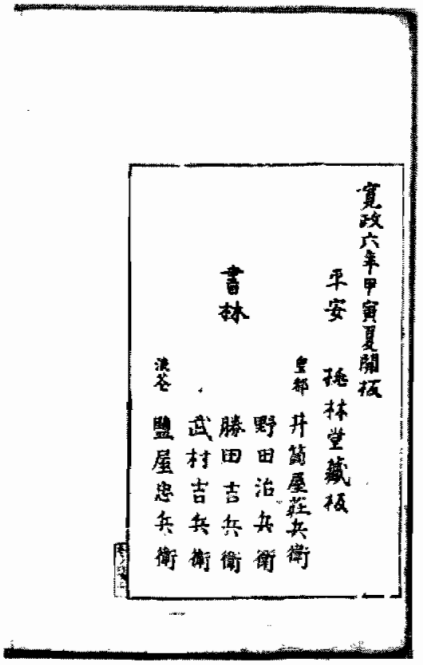


図20 『発句題林集』刊記

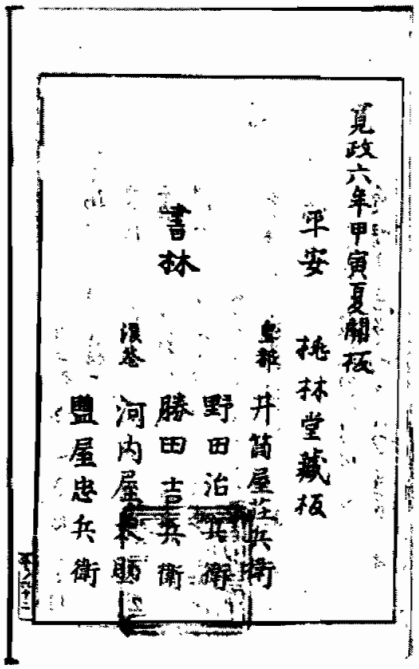


図23 『題林発句集』刊記

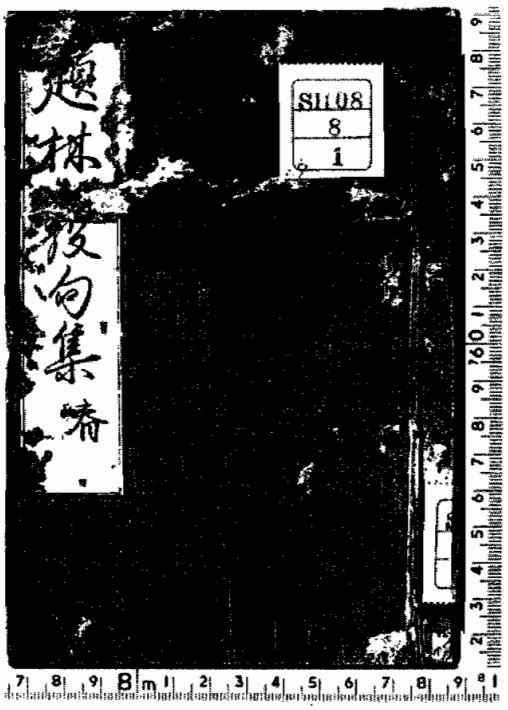


図22 『題林発句集』表紙

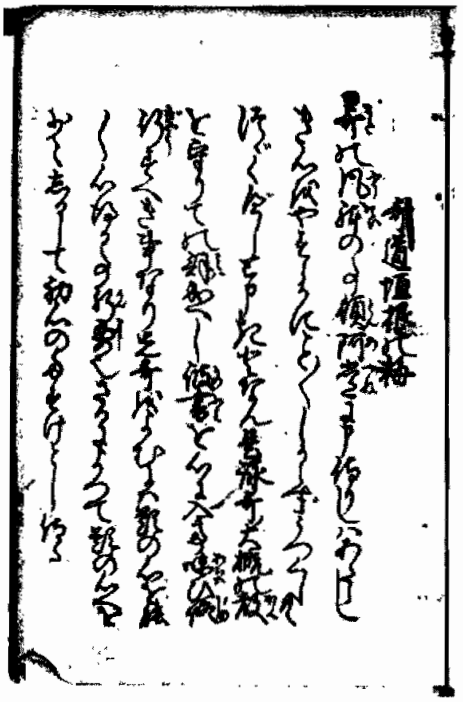


図24 「歌道垣根の梅」本文冒頭部

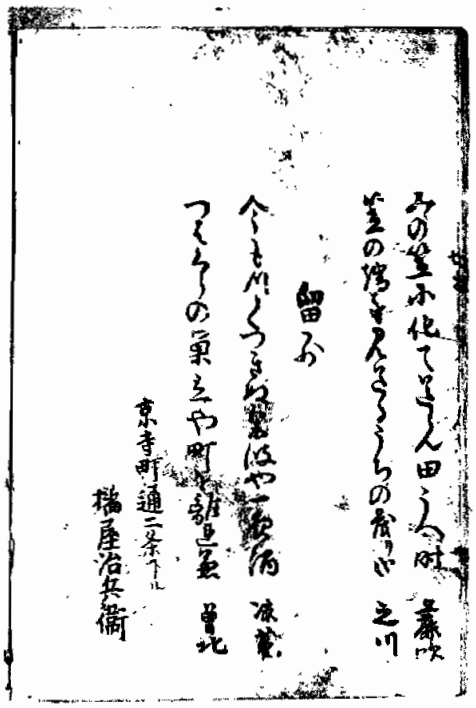


図25 「七さみだれ」終丁刊記部

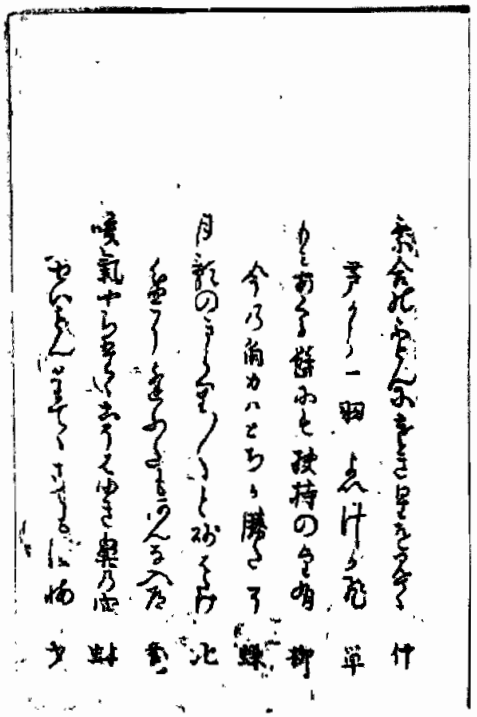


図26 「糸魚川」終丁刊記部・6丁表

Printing Blocks of "Oinokobumi"

Kazuaki NAGAI